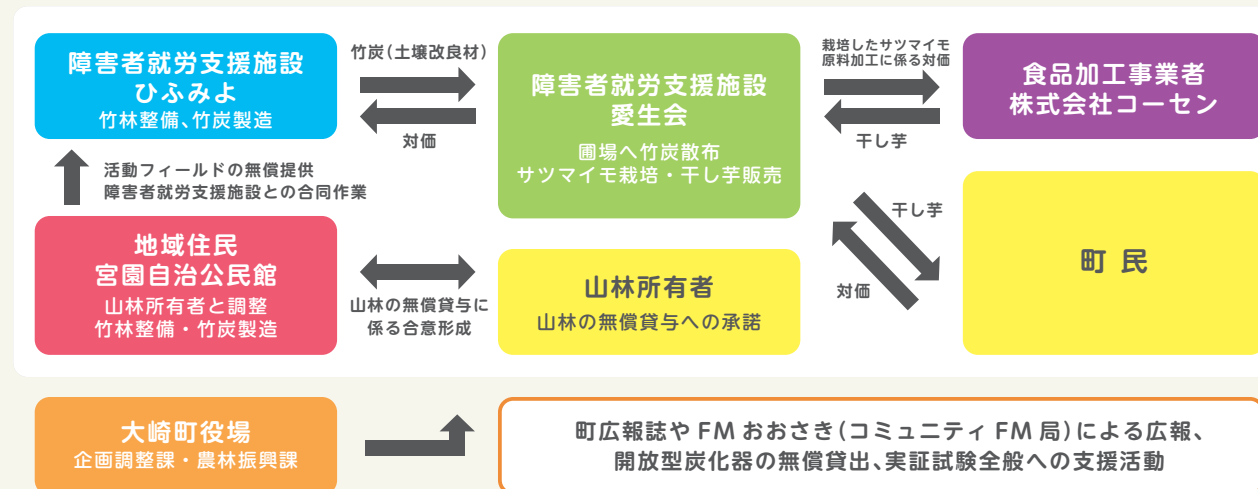


## 鹿児島県大崎町 実証モデル



### 実証モデルの関係者とその役割

#### 地域住民(宮園自治公民館)

山林所有者と調整、活動フィールドの無償提供、障害者就労支援施設との合同作業

#### 障害者就労支援施設(ひふみよベースファーム大崎)

竹林整備、開放型炭化器による竹炭製造及び回収

#### 障害者就労支援施設(社会福祉法人愛生会)

圃場へ竹炭散布、サツマイモ栽培、干し芋の販売

#### 食品加工事業者(株式会社コーセン)

障害者就労支援施設(社会福祉法人愛生会)が栽培したサツマイモを加工し、干し芋を製造

#### 大崎町社会福祉協議会

障害者就労支援施設や地域住民の活動支援

#### 慶應義塾大学

実証試験全般の実施、関係者への施策提言

#### 大崎町役場

町広報誌やラジオによる広報、開放型炭化器の無償貸出、実証試験全般への支援

## Message

障がい者や高齢者が放置竹林の整備や竹材加工の担い手となるコミュニティモデルの開発により、放置竹林の拡大防止だけでなく、働く機会の創出、就業促進につながり、さらには健康増進・生きがいがづくり・社会参加の機会を創出することが可能になると考えています。また、このことは次のことにつながるのではないのでしょうか。

#### 1人1人が胸をはって

#### 一生懸命働くことのできる社会づくり

障がいのある方が、今ある能力で仕事ができるように、そして、より能力を高めていけるように、作業方法の工夫・改善をおこなうことで、胸をはって一生懸命働くことができるようになること。

#### 人の特性を活かし、資源として使えるものを活かす

「誰もが働ける皆勤社会」、「環境負荷の低減」の両立を目指して、地域資源の活用と障がい者や高齢者の雇用という収益と社会性を両立させたモデルを開発することで、誰もがその能力と適性に応じた雇用の場に就き、地域で自立した生活を送ることができるようになること。

私たちは、農福連携の取組で求められていることは、支援者と利用者の一方的な関係ではなく、社会的背景の異なる人と人が支え合うつながりを創出することだと考えます。鹿児島県大崎町の事例は、この相互扶助の関係を「誰ひとり取り残さない地域づくり」につなげているものであり、目指すべき社会の一つのモデル事例ではないのでしょうか。誰もが生きやすい社会を目指して、今後も取組を続けていきたいと考えています。



田中 力  
Tanaka Tsutomu

東京都江東区出身。2007年3月広島大学 工学部第四類 地球環境工学課程を卒業。大学では、リモートセンシングによる藻場・サンゴ礁の底質マッピング手法について研究。2007年4月広島県庁に入庁。県庁では、環境政策課、循環型社会課、環境県民総務課、産業廃棄物対策課などを経験。環境政策課では、里山の未利用材をバイオマス燃料として地域内で活用するための仕組みづくりを担当。各地の地域コミュニティと関わる中で、人口減少下における地域コミュニティのあり方、竹材の利用促進、障害者や高齢者の働く機会の創出に関心を持つ。2022年4月慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科研究員、大崎町の地域おこし研究員(政策研究員)に就任。2025年10月より鹿児島大学グローバルセンター客員研究員。聴覚障害当事者として、誰もが生きやすい社会づくりに取り組む。

## 「竹・福・商」連携による 大崎町「竹の資源化」モデル



Bamboo, Fortune, Commerce Collaboration  
Osaki Town Bamboo Resource Utilization Model



竹 竹林  
福 福祉  
商 企業・事業者



## 活動概要

### 優秀賞受賞



農林水産省が表彰している  
ノウフク・アワード2024で  
『竹福商連携による竹の資源化モデル』が  
優秀賞を受賞いたしました

「資源リサイクル率 16 回日本一の町」鹿児島県大崎町において、厄介者扱いされる放置竹林を資源として捉え、障害者や高齢者が、放置竹林の整備や竹材加工の担い手となる取組を実践しています。秋～冬明けまでの間に週1回、障害者や高齢者が竹林を手入れし、そこで出てくる不用な竹を竹炭にします。そして、竹炭はサツマイモ畑の土壌改良に使われ、収穫したサツマイモは干し芋に加工し、特産品「愛生会の干し芋」として販売します。この一連の実践は、町内の障害者就労支援施設2箇所、地域住民（高齢者サロン）、食品加工事業者（干し芋製造）、大崎町社会福祉協議会、慶應義塾大学、大崎町役場の協働による、新たな農福連携の形を示したものです。「竹林整備や、竹炭・干しいもづくりが、人と人とを紡ぎ、そして結ぶ」、そんな人と竹の共生関係を築くことを私たちは目指しています。

## 1 活動の広がり 地域内はもちろん地域外に活動やその成果が広がっているかどうか。

### 大崎町内での広がり

この実践は2022年9月～2023年3月までの間、鹿児島県大崎町宮園地区で行ったものですが、同町他地区（2地区）でも、2023年2月に開放型炭化器が導入され、周辺の住民が散策する通路沿い、学校児童が通る通学路沿いの**竹林整備、竹材炭化が行われ、畑の土壌改良**に使われました。



大崎町での竹炭製造

### 薩摩川内市への展開

2023年3月には、大崎町での実践をもとに鹿児島県薩摩川内市において、**竹福商連携による竹の資源化を行う取組**が動き出しました。障害者就労支援施設、地域住民、酒造事業者の連携により、竹林整備、竹材炭化、土壌改良材として圃場への竹炭散布、サツマイモ栽培、食品加工（芋焼酎）、販売を行うというものです。障害者就労支援施設、地域住民（高齢者サロン等）を核とした**「竹の資源化モデル」**は汎用性があり、他地域への展開可能性があるものと考えています。



薩摩川内市への展開

## 2 持続可能性 取組が一過性のものでなく、今後の持続可能性を含んだものであること。

### 弱さを強さへ

参加者の働く場所と居場所を確保するとともに、参加者が**「誰かのために役立つ」**というやりがいを得ることが、活動継続につながるものと考えています。障がい者と高齢者が定期的に竹林整備に入ること、お互いに「弱さ」を持つ存在がいる空間を生み出し、作業の細分化等の工夫を行うことで、**「弱さ」を「強さ」に編集しなおす新たな地域コミュニティ**を創出しました。



竹林整備の様子

### 相互補完による自己有用感

誰にでも「弱さ」はあります。「聞こえない」、「ひざや腰など痛いところがある」、「人とのコミュニケーションが苦手」など、実に多様です。**「竹林整備」**という共通の仕事をすることで、お互いの「弱さ」が自然と見えてきます。「弱さ」をお互いが知り、お互いができることをすることで（相互補完）、**参加者が自己有用感を得る**ことにつながり、そのことが取組を持続的にさせることにつながるものと考えています。



多様な参加者

## 3 地域資源の活用 地域づくりに地域資源がどのように活かされているか。

### 新たな担い手の創出

竹の資源化モデルを導入した結果、**障がい者や高齢者等が放置竹林の整備や竹材加工の担い手**となり、竹林整備が促進されました。2022年9月～2025年3月末までに、計92日184時間、延べ1,342名が竹林整備に参加しています。なお、2025年11月に実施した「農福連携現地研修会 in 川内」の参加者にアンケート調査を行った所、25名中全員が「このモデルを継続すべき」と回答しています。



地域の子どもたち

### 資源としての放置竹林

伐採した竹の炭化処理をしたことで、**3,027平方メートルの放置竹林が管理竹林**となり、特用林産物である筍が収穫できる状態となりました。製造した竹炭は社会福祉法人愛生会に販売されたほか、竹林整備に参加した地域住民により活用されています。加えて、2023年4月には、2m程度に成長した幼竹を塩蔵メンマにする新たな取組が始まりました。また、社会福祉法人愛生会では、2023年度には**竹炭散布面積を前年比5倍の20a**に広げるなど、取組規模を拡大しており、地域全体で厄介者扱いしていた放置竹林を資源として活用することを私たちは目指しています。



塩蔵メンマづくり

## 4 創意工夫 創意工夫を活かした、独自の地域づくりが行われているか。

### 既存の枠組みを活かす

この実践は**「障害者就労支援施設や高齢者サロンにおいて竹林整備をヒューマンサービスの一環とする」**という既存の枠組を活かした点に特徴があります。障害者就労支援施設は、障害福祉サービスを提供することで、職員の賃金等について公的な制度により報酬を得ることができます。本事例では既存のビジネスモデルを活かして、障害者就労支援施設に対して「放置竹林」という新たな職域を導入したものです。



利用者による竹炭回収

### 利用者の工賃向上へ

また、就労継続支援B型事業所に通う利用者の全国平均工賃は、令和4年度実績で17,031円、時給換算243円ですが、竹林整備に参加する障がい者は、当該作業に限り、**時給換算で600円に向上**しました。工賃向上が就労に対する意欲や価値観を高め、働くことを通じて社会参加することが、自らの存在価値や生き甲斐を見出し、**「誰もが誰かのために、共に生きる」**そんな共生社会につながるものと考えています。



利用者による竹炭散布

## 5 成果 地域づくりの成果が着実に上がり、地域の活性化につながっているか。

### 鹿児島の「ポテンシャル」

令和5年生産農業所得統計の結果によると、農業算出額に占める生産農業所得の割合を付加価値率と定義した場合、**鹿児島県の付加価値率は28.2%であり、全国第47位**となります。付加価値率が低いということは、自社の取り分が少なく、原材料費などの中間投入額で多くが消えてしまっていることを意味します。しかしながら、見方を変えると、鹿児島県は**魅力ある地域資源「ポテンシャル」を豊富に有している**と言えます。



竹炭の出荷

### 新たな価値の創出

この実践では、**無価値であった竹資源を炭化処理することにより、竹炭としての販売**が可能となり（1300円／20L）、竹林整備に参加する障がい者の工賃向上につながっています。また、**竹炭散布及び食品加工**を行うことにより、特産品「愛生会の干し芋」としての新たな価値を創出し、サツマイモ（紅はるか）を通常100円/kgで出荷するところ、初年度は711円/kgまで収益性をあげることができました。



愛生会の干し芋「結紡」